



新型コロナウイルス感染拡大が止まらない。この会報が届くころには少しは収まっているだろうか。

2月、外国人観光客がガタッと減ったとき、今年の京都の桜は空いてるやろうな、見に行かなきゃ！と思っていたのはまさに対岸の火事であったわけです。緊急事態宣言の出ている今は、ただ、家でじっとしているのみ。車で出かけて、人の居ない山に登って誰とも会わずならいいのではないの？という考えもあるらしいが、いやいや、今はすべての人が不要不急の外出は我慢しなきゃね。

福祉会館も休館になり、手話サークルも難聴サークルも活動なし、趣味の水彩画もお習字もお茶も絵手紙も休み。出たがりの行きたがりの私ですが、意外にも家でのおんびり過ごしている。たまっていた10年分のスナップ写真を整理して、バラなど庭の手入れにいそしみ、手作りマスクをミシンしたり、合間に本も少し読んで、近場のウォーキング散歩。

『洛中洛外をゆく』は2017年に急逝した葉室麟の著作3冊「乾山晩秋」(尾形光琳・乾山兄弟)、「墨龍賦」(海北友松)、「孤篷のひと」(小堀遠州)にまつわる京都めぐりの書である。ドラマ化された「蛍草」はよかったけれど、葉室麟の本は直木賞を取った「蝸の記」しか読んでいないが、この本はなじみの寺社や庭、絵画が出てくるので、思い出しながら興味深く読み進んだ。上記3冊のうちで読むなら小堀遠州の小説かな。遠州って作庭家として認識していたが、元は利休の次の織部の弟子で茶人だった。先の2人のようなカリスマもなければ、ドラマチックなエピソードもなく、小説の題材としては極めて魅力のない人物らしいが、読むのに暑苦しくなくてよさそう(笑) 相手が誰であろうと、望む人には平等に茶を点て、亡くなる前年には50回も茶会を開いて多くの人をもてなした。

「相手あってこそ茶」「ひとはひとりでは生きられぬ」「さほどきらびやかに目立ちもせず、慎み深いものだった」「ほんとうは劇的なのに、とりあえず普通に生きている。そういうものの値打ちを書いてみたい」

とりあえず普通に生きている、外から見ればなんの不幸も不自由もなく気楽に暮らしているだけに見えるひとも、それなりに見えないところでいろんな苦勞をしのいで、悩みを抱えてなんとか生きているんやろなと思う。年取ったら病気になったら「そんなにがんばらなくてもええんよ」と言えるゆとりや余裕がある世の中になればいいですね。

日本庭園などに見かける洞水門＝水琴窟は小堀遠州の発明である。やっぱり、自分の目で見て記憶に残る絵や庭は値打ちがある。4月以降気持ち的には内向きになっているが、でもまあ、お出かけ解除になれば、また、あちこちで歩きたいわたくしです。

京都に通学していた学生時代は、寺社仏閣のような抹茶臭い辛気臭いところは見向きもしなかったが、ここ10年ほどは趣味のカメラをお供によく訪ねる。ただ、仏像関係にはほとんど興味はなく、建物やお庭、絵画を中心に京の雅を思いめぐらす。

京都の名所、おすすめはいくらでもあるだろうけど、私のお気に入りのお寺は禅と茶を伝えた栄西(ようさい)禅師開山の建仁寺。歴史もある大きなお寺で、地理的にも行きやすいわりに、紅葉のころも空いていて私的な穴場。海北友松の「方丈障壁画雲竜図」、国宝「風神雷神図屏風」(共に本物は国立京都博物館に委託)、2002年に描かれた法堂の天井画「双龍図」は圧倒的に天から迫ってくる。「○△□乃庭」という不思議な名前のお庭もあり、その中で、四方から眺められる本坊の「潮音庭」が素晴らしい。

手始めに手元にある「墨龍賦」でも読んでみるかな。なにしろ、暇な時間はこの先まだまだありそうなので。

『洛中洛外をゆく』

葉室 麟

KKベストセラーズ